

幕末明治の写真師列伝 第五十六回 内田九一 その二十一

『大日本全国名所一覽』（マリサ・ディ・ルツ、石黒敬章監修）で紹介されている写真アルバムにも内田九一撮影の写真で、以下のものが掲載されている。

「瀧見御茶屋」、「牛込堀端」、「聖堂前より外神田を望む」、「宇治橋」、「鳥羽浦」、「下関亀山八幡鳥居」、「鹿児島城並びに城山を望む」、「島津邸」、「港口」

これらの写真は、一般社団法人霞会館所蔵の明治5年『西国巡幸』二帖のアルバムにも同じ写真があることから、内田九一が撮影したものといえるだろう。特にこの「瀧見御茶屋」とある写真は、吹上御苑の瀧見御茶屋の中に明治天皇が居られて、内田九一がその庭で畏まって御用伺いをしているものという。厳密に言えば内田九一が写っていることから、内田九一が撮影したものではなく、内田九一の弟子の誰か、あるいは上野彦馬が撮ったものであろう。また、この写真は「瀧見御茶屋」とあるが、飯島樹氏による画像分析によれば、吹上御苑の瀧見御茶屋ではなく梅茶屋のようである。

内田九一自身が写っている写真としては、「内田九一が上野彦馬と彦馬の門人と三人でいっしょに写ったもの」があるが、これは明治6年（1873）に内田九一が長崎に帰省した際に上野彦馬の写真館で撮影した写真で、もう一人の門人とは飯岡仙之助である。この時に撮影された飯岡仙之助だけの名刺判写真も別にある。また、九一は翌明治7年（1874）にそれまでに撮影した長崎、東京、大阪、京都、神戸、兵庫の風景写真を、『VIEWS OF JAPAN』と題した写真アルバム（長崎歴史文化博物館蔵）にまとめて上野彦馬に送っている。またこの写真アルバム以外にも2冊の写真アルバムがあり、その内容を見ていると、そのほとんどの写真が内田九一撮影の風景写真であることがこれから判る。横浜写真の写真アルバムの中に、内田九一撮影の風景写真が入っている事例がよくあるが、これは明治4年頃から内田九一の写真館で、風景写真のネガの複製も同業者の他の写真館へ販売していたからである。

復刻版『ザ・ファー・イースト』付録にある「ジョン・レディー・ブラックと『ザ・ファー・イースト』」（文学博士 所 三男）によれば、「3 挿入写真について」の項で以下のように記述されている。

「(前略) さて、すでにふれたように、『ザ・ファー・イースト』の挿入写真は、とりわけ前半はオーストリア生まれの専属カメラマンのミヒャエル・モーザー（注1）の撮影にかかり、ほかには日本人又は外国人の作品を含んでいる。ミヒャエル・モーザーの去ったあと、後任者が彼には及びもつかないことを、ブラックは心配している。ブラックは、イギリス人の日光旅行で撮影してきた写真の不足を補うため、東京浅草の内田写真館より原板を借用したこともある。(後略)」

このことから、『ザ・ファー・イースト』の挿入写真について詳細に検討してみると、「この号にのせた5つの写真はいずれも江戸浅草にスタジオをもつ日本人写真家内田氏の撮影にかかっている。〔第21号から本号（*第21号明治6年4月1日から第23号明治6年5月1日）までの連載記事を参照せよ。〕」とあり、日光関係の写真の他にも、以下の写真が掲載されていることが判る。

第6号明治5年7月13日には、「浅草の仏像」「江戸浅草の塔」

第14号明治5年11月16日には、「江戸城内、内濠付近」

第18号明治6年2月17日には、「九段の神社」

第19号明治6年3月4日には、「ミカドの御所」

第20号明治6年3月17日には、「日光より9マイル奥の森林で」

第21号明治6年4月1日には、「ある農家の庭にて」「日光まで9マイルの中禅寺湖畔」「日光から半マイル、路上の寺」

第22号明治6年4月17日には、「日光への道・奔流」「日光の境内及び門」

第23号明治6年5月1日には、「日光付近の滝」「日光への入口」「日光の社寺」「日光付近の川」「日光の社寺」

これ以外にもミヒャエル・モーザーがオーストリアへ帰国した以降の『ザ・ファー・イースト』には、

第1号明治6年7月1日に、「江戸アメリカ公使館の古木」

第3号明治7年3月に、「芝増上寺の山門」「芝二天門」「芝の釣鐘」

第4号明治7年4月に、「芝の大通り」「芝の2代徳川將軍廟への入口」

第5号明治7年5月に、「江戸芝の寺院」「芝の鼓楼」

第6号明治7年6月に、「京都の城」「芝の徳川家の寺院」

第3号明治7年9月30日東京印刷、横浜発行に、「頼朝を祀る日光法華堂」「日光東照宮の徳川家康の墓」「日光家康廟の内庭」「霧吹の滝」などの写真があり、今後、この『ザ・ファー・イースト』の挿入写真についての研究が進めば、もっと他にも内田九一が撮影した写真が掲載されていることが判明することだろう。

『ザ・ファー・イースト』の専属カメラマン、ミヒャエル・モーザーは、内田九一の風景写真の中にもミヒャエル・モーザー自身が写っている例があるから、内田九一とミヒャエル・モーザーは親しい関係だったと思われる。このことからミヒャエル・モーザーは内田九一の撮影に同行する弟子の一人だとも考えられるのだが、ミヒャエル・モーザーの写真コレクションに内田九一の写真が数多くあるのはそのためだと思われる。また、ミヒャエル・モーザーは帰国すると内田九一の写真のネガから名刺判写真を複写して、自分の写真館でそれらの写真を販売している。

注1：創刊以降3巻まで、「ファー・イースト」に写真を提供したのは、オーストリア人の写真家、ミヒャエル・モーザー（Michael Moser 1853～1912年）であった。しかし1873（明治6）年、モーザーが離日したため、同質の写真の入手が難しくなったのか、「ファー・イースト」の紙面構成は、4巻以降大きく変わる。隔週の刊行が月刊となり、本文中に貼り込まれていた写真が、片面だけに写真を貼った台紙を記事の間に挿入するようになる。そのため、現存する4巻以降の「ファー・イースト」においては、写真の挿入されている位置が一定ではなく、抜けている場合もある。前出の『The Far East』復刻版に収録されている巻末附録、金井圓（かひい まどか）編『ザ・ファー・イースト』貼付写真総目録及び解説に示されたページに、必ずしも同じ写真の貼られた台紙が挟まれているわけではない。（横浜開港資料館『開港のひろば』第99号（2008（平成20）年1月30日発行）より）

（森重和雄）